

## Johns Hopkins 研修

研修医 2 年 安永 雅

3 年前よりスタートした研修医 2 年目を対象とした海外研修プログラムで、2010 年 4 月の 1 ヶ月間、アメリカの The Johns Hopkins Hospital(JHH)で研修をさせて頂きました。私が昨年海外研修プログラムのお話を伺った際にはまだ、進路として考えているリハビリテーション科での研修例はなく、整形外科で研修が出来たらと考えていたところ、本プログラムディレクターである長谷川徹教授よりリハビリテーション科 榎原彰夫教授を通じて JHH のリハビリテーション科で海外研修を受け入れて頂けることとなり、これ以上ない機会に恵まれました。

研修先の Johns Hopkins University はアメリカ東海岸、Washington D.C.から北東に車で 1 時間半ほどの距離に位置する Maryland 州 Baltimore にある私立大学です。Baltimore は古くからの港湾都市で、南北戦争の舞台になったことで有名な街です。ただ、行く以前からとても治安が悪いとの噂を先生方から伺い、内心生きて帰って来られるのかと不安に思っていました。今回渡航するに当たり、この 4 月から Hopkins で Postdoctoral Research Fellow として留学される平岡崇先生のご準備のため渡米される目谷浩通先生に同行させて頂きました。フライト時間は成田から Washington Dulles Airport まで約 13 時間です。現地時刻は日本より 13 時間遅れ(summer time 時)で、時間だけは日本のほぼ真裏です。緯度は仙台と同じくらいなのですが、着いた当初は持っていった服を間違えたかと思うほど日差しが強い真夏日が数日続き、それ以降は岡山とさほど変わらない気候だった印象です。

到着初日、Hopkins でのスケジュールを組んで下さった Marlis Gonzalez-Fernandez 先生にお会い出来、まだ時差ボケの残る翌日から早速 Good Samaritan Hospital(GSH)という大学関連の市中病院に伺えることになりました。右も左も解らないまま GSH まで平岡先生に連れて来て頂き Physical Medicine and Rehabilitation(PM&R)の office に入った時は相当緊張していたように思います。GSH では 2 週間のうち前半は外来を、後半は病棟を見せて頂きました。最初のうちは毎日違う先生にお会いし自己紹介をする度に、日本とアメリカの研修制度の違い(米国では卒後 1 年目が Intern、卒後 2~4 年目は House Staff(Resident)として研修)から自分の立場を説明するのも一苦労しました。GSH の外来はいわゆる専門外来の形式を取っており、曜日毎に筋電図・脊損・痙性治療・脳卒中後・切断肢(義肢)と、分野が分かれていました。一人の先生が外来で診る人数は午前中だけで多くて 10 人未満です。診療の流れは、先ず Resident の Dr.が予診をとって上級医に報告し、その場で一度治療指針を検討してから上級医の Dr.が診察するといった形で行われており、一人につき 20 分から長ければ 1 時間以上かけて診察していました。一人一人に長く時間を割く分、採血や画像検査等は当日すぐに施行するというより、予約を取って数ヶ月後になる場合が多かったように思いました。

リハビリテーション科の Resident の Dr.はほぼ 1~2 ヶ月ごとに外来や病棟の担当が変わったり、勤務先も大学病院(JHH)や市内の関連病院へ行き来したりするそうです。またリハ科では火曜日の

朝 8 時から 12 時まで、JHH で Resident Lecture の時間を設けており、毎週臨床医学や、解剖・薬理学といった基礎医学の講義を行っています。講義をするのは自科の Dr.だけでなく他科の Dr.や薬剤師の方と様々で、日常臨床に直に役立つ講義編成になっていたように思います。大学病院以外に出ている Resident も皆集合するので、その分移動が大変そうではありましたが。

GSH の 2 週目は脊損と脳卒中の病棟を見させて頂き、そこで初めて Physician Assistant(PA)という職業を知りました。彼らは Medical Doctor(MD)の元で診察をしたり、診断を下して薬剤の処方をしたり出来ますが、チャートや処方箋には PA の名前に MD の名前が併記されます。一見すると仕事ぶりはほとんど Dr.と変わらない印象です。また、病棟では毎朝定時に入院患者さん全員(1 病棟 20 名弱)のカンファレンスを行っていました。Social Worker さんが進行役となり Dr.・PA・Ns.・PT・OT・ST の皆で患者さんの現状・問題点・家族との状況・退院の目途について短い時間で話し合っています。患者さんの治療方針や変化を毎日スタッフ内で共有出来る点で素晴らしいシステムだと感じました。

GSH を 2 週間見学した後、JHH で 2 週間、同様に外来と病棟を見学させて頂きました。大学病院では市中病院と比較し規模が大きいのはもちろんですが、来院する患者さんの人種、文化が実に多様で驚きました。外来や病棟で、国外から来ている患者さんが通訳や英語の話せる家族を伴っておられる姿を度々目にしました。言葉に関しては、元々英語圏の人ばかりでないというお国柄なのか、自分のように拙い話し方であっても、なんとか聞き取って解りやすいように答えようとしてくれる人たちの心意気に本当に救われたように思います。

この研修を通じ多くの人と出会えたこと、同世代の友人が出来たことは、自分の一生の宝です。この一ヶ月で得た経験を人生の糧として今後の初期研修、後期研修へと生かし、医師として日々成長していきたいと思います。

今回の研修に参加するに当たり、リハビリテーション科での研修を企画し機会を与えてくださった、本プログラムディレクターである長谷川徹教授、リハビリテーション科 椿原彰夫教授、事前からのやりとりに加えて現地までの準備と同行をして頂いた目谷浩通先生、現地で毎日のように生活面をサポートしてくださった平岡崇先生、また Johns Hopkins University の Jeffrey B. Palmer 教授、Marlis Gonzalez-Fernandez 先生に深く御礼申し上げます。そして最後になりましたが研修期間中にも関わらず、このような機会を与えて頂いた、臨床教育研修センター長 柏原直樹教授、卒後臨床研修委員会委員長 中田昌男教授、角田司病院長、福永仁夫学長、川崎明德理事長をはじめとする川崎医科大学附属病院関係者の皆様に心から感謝しています。本当に有難うございました。



The Johns Hopkins  
Hospital  
正面に位置するtower



4/13のResident Lecture  
at JHH



Marlis  
Gonzalez-Fernandez先生  
のお宅にて平岡先生と



Good Samaritan Hospital  
にてお世話になった  
ResidentのDr.と



Johns Hopkins University  
PM&R  
Jeffrey B. Palmer教授と  
ResidentのDr.Kieu



The Johns Hopkins  
Hospitalにて  
お世話になった  
ResidentのDr.と